

『イノセント～夜に棲む鳥～』

著:久能千明

ill:蓮川 愛

「俺はあんたを知ってるぜ」

昂は、頭上で揺れる写真に手を伸ばすアウルの耳元に囁きかけた。

「それは僕の物だ！」

「仁科佑紀。鷹の巣天文台の主。アウル——」

アウルは写真を取り戻すことに必死で、彼我の距離が普通では考えられないくらい近くなっているのに気づかない。

目の前に白い顔、くっと上がった尖った顎、長い睫毛に縁取られた大きな瞳。白と黒で構成されたアウルの中で、薄く開いた唇だけがほんのりと赤い。——あの夜の距離だ。

「それだけじゃない……」

細い身体を引き寄せ、唇が触れる距離にある耳朶に囁く。

「体温が低いくせに、触られると一気に熱くなるんだよな……」

「——っ!?!」

耳朶に直接注ぎ込まれる声にか、それともその言葉にか、アウルがひくんと身体を揺らして動きを止めた。写真しか見ていなかったアウルの意識が昂に向けられる。

「……………っ」

息がかかる距離に驚いたのか、昂を見つめるアウルの瞳が見開かれた。

「まだあるぜ」

唇を歪め、低く笑いながら回した腕に力を込める。

「——っ!?!」

引き寄せられて、初めて腰を抱かれているのに気がついたらしい。伸ばしていた腕がだらりと下がり、かわりに身体が強張った。

息を詰めて動けなくなったアウルを見つめて、昂はブラックジーンズの中に指を差し入れた。

薄いシャツの上から背骨の窪みを軽くなぞる。

「——ここに、ホクロがある」

「な……っ」

昂の指が触れた瞬間、細い身体がぎくんと跳ね上がった。それに構わず、昂は背骨をたどるように指を上げた。髪に指を差し入れ、うなじの中央に軽く爪を立てる。

「ここにも」

「な……にを言って——」

「言っただろう？ 俺はあんたを知ってるんだ」

最後まで言わずに、昂はもう一方の腕も背中に回した。写真が足元に落ちる。

「……………っ」

きつく抱き締められて、アウルがくっと息を詰めた。あんなにも欲しがっていた写真に、アウルはもう反応しない。

「この感じ、思い出さないか……？」

腕の中で身を硬くするアウルを抱いて、昂が低く囁く。

「身に覚え、あるだろ——？」

「……………っ……………」

唇で髪を分け、耳朶に直接声を注ぎ込むと、アウルが小さく震え始めた。

「まだ判らないか？ 一週間前、正確には夜から明け方にかけて、品川のTホテルのあんたの部屋だよ……」

「……………っ!？」

これ以上は無理だと思っていた瞳が、さらに大きく見開かれた。ただでさえ白いアウルの肌が、みるみる色を失ってゆく。

「やっと思い出してくれたようだな。仁科佑紀サン」

くくっ……。喉で笑った昂が、ゆっくりと唇を吊り上げた。

「一応言っとくけど、誘ったのはあんただぜ」

「あ……………」

アウルが声にならない声を上げた。

擦れ声。息が洩れただけの小さな声。しかしそれは、ここに来てから聞いたアウルの声ではない。紛れもなく人間の、あの夜の青年の声だった。

「男を抱いたのは初めてだったが、結構面白かったぜ」

大きく見開かれた瞳に、自分が映っている。自分で見ても酷薄な表情だ。昂はその顔に向かって話し続ける。

「あんたもそれなりに楽しんでたよな……」

薄笑いの滲む声で囁いて、昂は血の気の失せた唇を指でゆっくりとなぞった。

まずい。昂は自分の声を聞きながら、ぼんやり焦り始めた。自分で自分が止められない。

こんな風に追い詰めるつもりはなかった。

ただ、一度きちんと話をしたかっただけだ。そしてもし機会があれば、あの時の話をしてみるつもりだった。

何故あんな虚ろな目をしていたのか。どうして自分に縋ったのか。

初対面の男、名前も知らない自分に必死にしがみついて泣き続けた理由が知りたい。

自分が納得出来ればそれ以上聞く気はない。余計な詮索をするつもりもない。誰にも言わないから安心して欲しい。そう告げようと思っていた。

なのに、再会した青年はアウルだった。鳥の眼で自分を見下ろして、硬い声で昂を知らないと言った。その目と言葉にたがが外れた。

忘れていたならそれでいいなんて、正義感ぶった気持ちは吹っ飛んだ。

思い出させてやる。俺を。あの夜を——。

昇華するきっかけを失った感情が、昂の中で妙な具合に熱を持って燻っていた。

「俺の名は昂、夏目昂だ」

「……なつめ、こう……………」

震える声が小さく繰り返した。

「そうだ。覚えてくれたか？」

その声に驚愕と動揺、それに怯えが混じっているのに下腹が疼くような満足を覚え

ながら、昂が薄く笑う。

「あの時は名前を言う余裕をくれなかったし、ここで紹介された時のことを、あんたは覚えてないみたいだからな」

「……っ」

間近で覗き込むと、昂の視線を避けるようにアウルが顔を背ける。唇をなぞっていた手で顎を捉え、指に力を込めて顎を上げさせた。

「俺を見ろよ」

視線を泳がせるアウルの顎に指を食い込ませ、強引に目を合わせる。

「俺は夏目昂。ここでは雑用係、ホテルではバーテン、——そして、あんたを抱いた男だ」

「あ……」

何を否定したいのか、アウルが小さく首を振った。拘束から逃れようと身動ぐのを許さず、さらに引き寄せる。

「や——っ」

悲鳴じみた声を上げて、アウルが顎を捉える昂の手を掴んだ。自分から引き剥がそうと弱々しくもがく。

「頭は覚えてなくても、カラダは覚えてるんじゃないか？」

「……………っ……………」

悪擦れした台詞を思い切り露悪的に囁くと、アウルがくっと思息を詰めた。大きく見開かれた瞳は凍りついたように昂を見つめ、細い指も抱き締めた身体も冷えている。

「なんなら試してみるか……？」

その冷えた耳に息を注ぎ込む。自分の言葉に煽られている自覚はあったが、普段なら絶対に言わない言葉が下腹を疼かせて、意識を赤く濁らせる。

逃げようとしているのか、アウルが昂の手首を握り締めた。

それを軽々と振り払って抵抗を封じると、昂は差し入れた脚でアウルの膝を割った。

「————っ!!」

強引な侵入を拒むように強張った足は、すぐに力を失って昂の下肢を受け入れる。

「……………」

がくりと膝が折れ、一人では立っていられなくなったアウルが自分を苛む男に縋りついた。

嫌な気分だ。昂は奥歯を噛み締めた。俺は、捕えた小鳥の羽を毳るようなことをしている。

そう思うのに、唇は薄笑いを刻み、視線は震えるアウルを貪るように見つめている。

焦りとサディスティックな感情が、ちっとも混じり合わずに昂の中で荒れ狂っていた。

可哀相だ、ここまですることはないという気持ちは確かにあるのに、怯える顔がもっと見たい、いっそ泣かせたいという暗い衝動が止められない。

「……………知ら、ない……………」

アウルが擦れ声で呟いた。

「なに？」

「きみのことなんか知らない！ 知らない知らない知らな————っ!!」

髪を振り、目を背けて、アウルが叫んだ。知らない！ 譫言のように繰り返しながら胸に手を当て、昂から離れようと腕を突っ張る。精一杯の否定、精一杯の力。

彼の抵抗が、逆に昂の暗い炎を煽った。腕に力を込めて、拘束した身体を乱暴に揺さぶる。

「————っ!!」

ひっと小さく喉を鳴らして、アウルの身体から力が抜けた。見開かれた目が昂を見る。大きな瞳いっぱいに浮かんだ怯えに産毛が逆立つのを感じて、昂は奥歯を噛み締めた。

「俺を知らないって……？」

唇を歪ませて、歯の間から声を押し出す。

苛立ちが、粘度の高い嗜虐性を帯びて胸を満たしていた。

やめろ、もう止せ。頭の中のどこか醒めた部分から聞こえる制止を振り切って、昂は冷えた身体を抱き締めた。

「————なら……」

ブレーキとアクセルを同時に踏み込むような気分は濁った興奮になって、昂の視界を赤く染めている。

「もう一度抱いたら思い出せるか……？」

本文 p81～90 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>